体育科･保健体育科

酒井祐太・八反田耕士・小田啓史

Ⅰ　はじめに

今日，グローバル化，情報化，少子・高齢化が急速に進展する中，社会構造の変化に伴い私たちのライフスタイルも変化していくことが予想される。子どもたち（児童・生徒）が大人になったときのライフスタイルを鑑みたとき，運動・スポーツへのかかわり方も多様化していくであろう。また，幸福な生活を営むために，文化としての運動・スポーツをより主体的に享受する重要性は高まっていくと予想する。このような情勢の中，これまで以上に生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する基礎を培うことが学校体育に求められ，体育科・保健体育科（以下，体育科）の授業が果たす役割は大きなウエイトを担うであろう。つまり，授業を通して主体的に体を動かし，スポーツに親しむこと，心身の健全な発達，健康及び体力の保持増進，爽快感・達成感など精神的な充足も図ること，課題に主体的に取り組むこと，他者とのかかわりを深めること，コミュニケーション能力を育成すること等，豊かなスポーツライフの基礎となる資質・能力を育成することが肝要である。加えて，授業で学んだことと生活とのかかわりが意識されたり，実生活に活用されたりして，運動・スポーツの価値をより広く，深く認識されるような授業が一層求められていくと考えられる。

東雲小学校・中学校では，昨年度より，「『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造」を研究テーマと設定して実践研究を始めた。本研究における「グローバル時代をきりひらく資質・能力」は，先行研究と先進校の取り組みや本校の教育目標から「さまざまな文化や価値観を理解し認め合いながら自分の考えを明確にして問題を解決する力」と定義し，その要素として，「主体性（自律的な活動・チャレンジ精神）」「多様性（さまざまな文化に対する受容）」「協働性（コラボレーション）」の３つをキーワードとして挙げた。

体育科においては，「主体性」は運動を楽しみ，課題に向かって進んで取り組むこと，「多様性」は，他者の意見や考えを受容し，違いを認めること，「協働性」は他者との対話や意見交換を通して課題解決に向かって考えをもつこととととらえることにした。これら３つの要素を高めていくためには，児童・生徒が３つの要素が発揮される授業場面，つまり協働的問題解決が生起する授業を多く経験することが重要であると考えた。

協働的問題解決（2014，グリフィンら）は，21 世紀型スキルを獲得するために用いられる代表的な手法の１つである。三宅（2014）は，協働的問題解決に関して「参加するメンバーひとりひとりが『すでにある程度分かっていること』を持ち寄り，それらの限界を超えて，全員の見方や考え方をひとりひとりが積極的に取捨選択と統合を繰り返して，『互いの持てる力を持ち寄らなければ到達できなかった解』に到達することである」と述べている。体育科においても，「資質・能力」を育成する指導方略として，協働的問題解決を取り上げる。授業の中で課題に向かって仲間と対話を繰り返しながら考えを持ち寄り，解に向かって協働的に学ぶことで，主体性を育むことができると考える。このような，協働的問題解決が生起する授業を行い，仲間と協働しながら課題の解決に向けて取り組み，運動のおもしろさを味わい，技能を習得（できる）することで児童・生徒の主体性を高めることにつながり，豊かなスポーツライフを実現するための素地を培うことにつながると考えた。図１は体育科が作成したグローバル時代をきりひらく資質・能力を高めるモデル（試案）である。体育科では，これら３要素について，多様性と協働性が相互に関係し合い，主体性を育むものだと整理し，体育科の授業において，協働的問題解決が生起する授業デザインの視点について研究を行っていく。

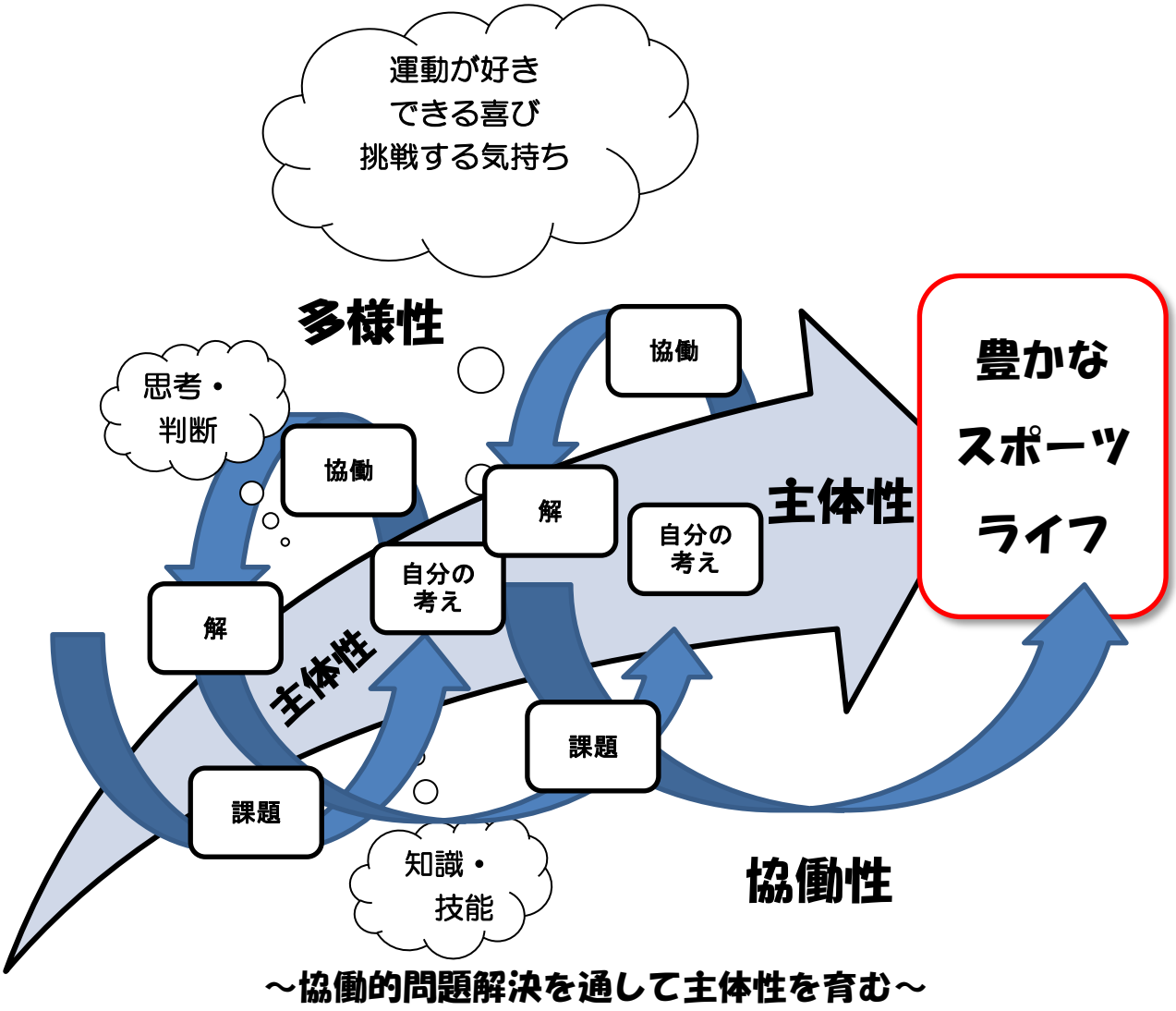

図1　体育科におけるグローバル時代をきりひらく資質･能力を高めるモデル

Ⅱ　本年度の研究計画

1　昨年度の研究

昨年度は，ボール運動・球技領域「ネット型」の教材を研究対象とし，協働的な学びが促進する授業づくりについて実践的研究を行った。ボール運動・球技領域「ネット型」において，協働的な学びを促進するために，児童・生徒の実態に合わせて単元を再構成したり，発問の精選や ICT を活用したりするなど，指導過程の工夫に重点を置いて取り組んできた。その結果，以下の点が明らかになった。

【目標】小・中学校のボール運動・球技領域「ネット型」において，協働的な学びのプロセスを明らかにし，協働的な学びを促進させるための知見を得る。
【結果（○成果，●課題）】 （小学校　第１学年） ○作戦づくりやゲームを通して，相手の話を聞いたり，自分たちもがまんしたりするなど，集団で楽しくゲームが進むように気を付けていたということが分かった。 ●協働的な学びを促進させるためには，ルールを設定する際に子どもへ問いかけをし，合意形成を図る場を設定することが必要である。

（小学校　第６学年） ○練習やゲームの様子をVTR撮影し，視聴することでチームの課題を見つけ，改善に向けて児童が主体的に練習方法を考え，取り組むことができた。 ●技能習得に重点を置くと，戦術面を考える時間を保障することが難しい。協働的な学びにおいて，技能と思考・判断のバランスを考えながら単元を構成していくことが必要である。
（小学校　複式高学年） ○「いつ，何を，どう問いかけるか」を意識して発問を工夫することにより，児童の思考が揺さぶられ，深められることで児童にとって協働的に探究したい「課題」になった。 ●協働的な学びをより充実したものにするには，児童同士の関わり合う力が必要である。体育科の学習のみならず教育活動全体を通して，児童同士の関わり合う力を育てていくことが必要である。
（中学校　第３学年） ○タブレットを用いてサーブやアタックの返球率を集計し，データを活用することにより，生徒同士が勝つための方法について活発に話し合うようになった。 ●返球数の推移と実際のゲーム経験を結びつけて，チームとしての課題や解決策を具体的に挙げ，共有することは十分できたとはいえなかった。

２　研究の目的

昨年度の研究から発問の工夫，ICTを活用することで子どもの思考を促し，協働的な学びに影響することが確認できた。しかし，児童・生徒がどのように学んでいるのか，どのような教材が運動やスポーツへの参画意欲を高めるのに有効であったかなど，児童・生徒の運動・スポーツへの主体性を高めていくプロセスについては明らかになっていない。

そこで，本校体育科では，昨年度実践した内容を踏まえ，ジグソー法やICTの活用，単元構成の工夫，一単位時間の授業における指導過程の工夫や学校行事等を活用した教材設定の工夫，児童・生徒にとって解決したいと思えるような切実感のある課題の設定などの手立てを講じることによって，運動・スポーツへの主体性を育むための協働的問題解決を生起させる授業デザインの視点について知見を得ていく。

３　研究の方法

・児童・生徒の活動を記録したVTR分析
　単元前期，中期，後期における児童・生徒のパフォーマンスを記録し，比較検討
・毎時間の児童のふり返り記述
　抽出グループの発話や学習ノートの記述を分析
・質問紙による調査
　体育授業態度評価（診断的・総括的授業評価），児童による授業評価（形成的授業評価）の分析
・児童・生徒・グループの発話録音
　抽出した児童・生徒やグループの発話を録音，分析

４　研究会当日の授業

①小学校第６学年
「体つくり運動　－心を合わせて創り出そう・リズムなわとび－」
②小学校複式高学年
「器械運動　マット運動　－技をつないで金メダルを目指そう－」
③中学校第１学年
「器械運動　マット運動　－仲間と技のコツを追求しよう－」

【引用・参考文献】

小林一久『体育の授業づくり論』明治図書，1985.
文部科学省『中学校学習指導要領解説　保健体育編』　東山書房，2008.
文部科学省『小学校学習指導要領解説　体育編』東洋館，2008.
文部科学省『スポーツ基本法　平成 23 年法律第 78 号　条文』，2011
高橋健夫『新しい体育の授業研究』大修館書店，1989.
国立教育政策研究所『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理』，2013
日本教科教育学会『今なぜ、教科教育なのかー教科の本質を踏まえた授業づくり』文溪堂，2015
中央教育審議会『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について』，2014
グリフィン，マクゴー，ケア『21 世紀型スキルー学びと評価の新たな形ー』北大路書房，2014
田村学『授業を磨く』東洋館出版，2015
中央教育審議会『次期学習指導要領にむけたこれまでの審議のまとめ（素案）のポイント』，2016
国立教育政策研究所『国研ライブラリー　資質・能力（理論編)』，東洋館，2016
三宅芳雄，三宅なほみ『新訂　教育心理学概論』，放送大学教育振興会 2014